

# 近代大谷派教団社会事業の研究

## ——大草慧実の慈善事業——

佐賀枝 夏文

### 一

わが国の慈善事業、感化救済事業、社会事業、そして社会福祉に至る歩みは救貧の歴史であり、明治・大正・昭和とそれぞれの社会状況の違いから救貧のメルクマールは「農村の貧困」、「都市の貧困」、「戦争の貧困」とそれぞれ相違点はあるが、時代状況と社会状況の歪みもたらした問題であったといえる。がしかし明治・大正・昭和と歴史状況のなかで貧困は歴史的社会的産物であるにもかかわらず政府は救貧の策を講じなかったのは歴史的事実である。

殖産興業、富国強兵策のもとに近代国家形成へと長足の進歩をとげていた明治政府は、自らの政策によって生み出した農村の荒廃、都市のスラム化、戦争による物価騰貴によって惹起された生活破壊をかえりみることなく大正・昭和へと受け継ぐことになった。また近代国家の幕あけは、封建制度のもとにまがりなりにも血縁・地縁

による隣保相扶の形態が物心両面において形成され、そのうえに生活がなりたっていた生活形態を根本から解体してはしまったのである。

急激な変革のなかで血縁・地縁による隣保相扶が成り立たなくなっていたにもかかわらず、政府のとった策は「人民相互ノ情誼ニ因テ、其方法ヲ設ヘキ筈ニ候」と救貧のあり方を隣保相扶によっておこなうべきという思想を柱とするものであった。いかに実用性を欠いた政策であったか、明治政府が明治七年に制定した「恤救規則」にみる事ができる。またこのようなものがわが国の公的な救済の制度として存在しつづけたわけである。

生活形態の急変は明治政府が殖産興業、富国強兵策を打ちたてればたてると、旧来の生活形態に変化をもたらし、貧困が副産物として生みおとされるという構造を構築していった。

次から次へと生みおとされる問題に自らの課題として取りくみ、実践したのが明治の宗教家であり、その先鞭をつけたのは基督教徒であったが、仏教徒の参画によって明治期の慈善事業は一斉に着手されて、明治期の慈善事業の一大隆盛期の到来となる。とりわけ明治期の真宗大谷派教団が着手・参画した慈善事業は、慈善事業史・社会事業史に輝かしい業績を残している。なかでも真宗大谷派教団の慈善事業の先頭になつて開拓した人物として大草慧実をあげることができる。

## 二

大草慧実 は明治期の教団で重要な役割を果たした人物のひとつで、その業績の数々は教団の内外にその足跡をたどることができる。「故大草慧実師略伝」<sup>①</sup>からその主なものをあげると次のようになる。

師は真宗大谷派の僧なり。安政五年十月十日、京都市五条西洞院西入る長覚寺に生る。

明治二七年十一月、東京浅草別院の輪番に任ぜられる。

明治二八年、真宗中学を浅草小島町より谷中真島町に移す……

師は大に村上専精を助けて此の事を成就せしめたるなり。明治

二八年頃、師は免因保護所を大塚に設け……明治三〇年之を神田黒門町に建設したり……然るに明治三七年此の事業を再興して巢鴨に自立会を立つ。師は其の理事長たり。

明治三一年巢鴨監獄事件起る……従来巢鴨監獄の教誨事業は真宗大谷派に於いて……当時の典獄は考ふる所ありて、突然該監獄の教誨師四名を罷免して其督教徒を以て之に代らしめたり……師は奮然起て其の処置の不当なるを鳴らし……当局大臣に抗議し……所思を貫徹し善後の策を全うするを得たり。

明治三一年より翌年に亘り宗教法案の反対の運動……東本願寺寺務総長石川舜台師と共に大に仏徒に号令して政府に当り……法案を通過せしめざりしなり。

明治三四年四月、師は貧民救済を志し、無料宿泊所を浅草神吉町に建設す……無料宿泊所建設の元祖にてあるなり。

明治三四年、真宗大学を京都より東京に移転せり……師は故清沢満之師を助けて大に此の事に盡瘁せり。

明治三七年十二月、本山の財政甚だ窮し、頗る悲境に陥る……師は浅草別院にありて五万圓の金額を整え、辛じて本願寺の危急を救ふを得たり。

明治四三年『PRINCIPAL TEACHINGS OF THE TRUE SECT OF PURE LAND』(真宗要旨)を編す。

明治四四年四月、大谷派慈善事業協会の成立するや、師は深く心を之に加へ、事業を助くること多大なりき。

大草慧実の活躍した明治期の本山・地方の宗務機構はかならずしも安定した時期ではなかったが、明治二七年に東京浅草別院輪番に就任後、明治四五年病没するまでの間の活躍の場は常に東京浅草別院であつたと考えていいようである。大草慧実は主なものとして金沢別院輪番、内事局長、相統講事務局局長等の役職に就いているが、それらは兼務として復命していたものである。

### 三

巢鴨監獄事件と大草慧実の関係についてみると。明治三一年九月に巢鴨監獄事件が勃発する当初から、事件が終結するまで終始第一線の当事者として大草慧実が登場している。「巢鴨監獄教誨師事件顛末摘録」<sup>④</sup>にそのことを読みとることができる。

九月四日 巢鴨監獄署長有馬典獄浅草別院に來り輪番大草慧実に面会して教誨事務を改善せんことを述べ在來の教誨師に異動を加へんことを談ず輪番は典獄の意を本山に開申し其の指揮を待て而後確答せんことを以てす

### (中略)

同十七日 石川参務東上す

同十九日 石川参務は板垣内務大臣へ宛て教誨の方針宗教の資格に付て左の伺書を差出した

巢鴨監獄教誨事件は大草慧実と有馬典獄との面談にはじまり、本山石川舞台参務への開申を契機に大きな展開をみることとなる。石川舞台参務の総理大臣大隈重信への書簡が黜罰例違犯嫌疑事件へと展開し、石川舞台参務の始末書提出までに発展し、大谷派だけの問題にとどまらず、大きな波紋をよび超党派の大本山佛教青年会、佛教徒国民同盟などが結成され仏教の公認教運動へと発展するのであるが、巢鴨監獄事件は次のような経緯をたどり落着することになる。

教誨師留岡幸助は去三日其職を免ぜられ即日大谷派松見善月興地觀圓の兩人への同監獄教誨師の辞令を交付せらる翌日松見興地の兩人は同署に於いて留岡幸助より事務引継の手續を了したり茲に昨秋以來喧囂たりし監獄教誨師問題は全く復旧落着せり……

慈善事業によつて布教活動の戦略として勢力拡大をはかつていた基督教と大谷派は監獄教誨師の職責をめぐる激しい戦いを演じることになったのであるが、基督教側は当時すでに監獄教誨の理論で一流の慈善事業家と目されていた留岡幸助を擁しての総力戦となつ

た。それを受けて立ったのが大草慧実であったのである。

巢鴨監獄事件の一応の終結をみた明治三二年を契機に留岡幸助、大草慧実が監獄教誨師の領域からやや距離をおくことになる。巢鴨監獄事件の当事者が終結を契機にほぼ同時に、両者が歩んできた監獄教誨から撤退して新しい慈善事業を開拓していくことになる。留岡幸助は自ら構築した理論と実践を生かして「家庭学校」<sup>④</sup>建設へ情熱を傾けていくこととなる、「家庭学校」を明治三二年に巢鴨に開校し、同校はのちの巢鴨分校として開校する「北海道家庭学校」の前身でもある。明治三二年以降留岡幸助は監獄教誨とはやや異なる「家庭学校」で自らの実行主義を実践していくことになる。

また大草慧実も自ら起こした免因保護所から撤退し、同所は一時的な衰退を来し、明治三七年再興され自立会へと受け継がれる経過をたどることになる。大草慧実が監獄教誨事業、その関連事業である免因保護所から撤退し、明治三四年四月に浅草に「無料宿泊所」なるわが国において未開拓の慈善事業に着手することになる。

留岡幸助、大草慧実の両者が事件の終結を契機に監獄教誨から撤退した理由は不明であるが、監獄教誨は宗教家にとって、宗教実践として同一線上にあり、重要な宗教実践の場であるといえる。しかしその領域から一步踏みだすことによって真の社会問題と直面することになったのは事実である。また一步踏みだすことによって実践

された業績はわが国の社会事業史に輝かしい一ページを残したといえるだろう。

大草慧実が監獄教誨から撤退する契機となった巢鴨監獄事件は、大谷派教団にとっては監獄布教のゆるぎない確立期として位置づけられる重要な時期となった。その隆盛ぶりと監獄布教が教団の布教の一拠点であったことを『宗報』に毎回掲載されている詳細な教誨関連記事から読みとることができる。

#### 四

大草慧実の創設した「無料宿泊所」草創期について。大草慧実はその人であるにもかかわらず、明治三四年四月に設立された「無料宿泊所」に関する記事は、設立された翌年の明治三五年一月一日発行の『宗報』第二号であった。当時の大草慧実関連の記事としては遅きにすぎるといえるものであった。しかし耳なれない「無料宿泊所」の記事と派内一流の監獄教誨関連記事と併記するわけにいかなかったのかもしれない。後に公共職業安定所、公共職業安定法として育成、発展をとげる「無料宿泊所」の設立を『宗報』<sup>⑤</sup>は次のように報じている。



東京市浅草区松葉町にある無料宿泊所は昨年三四年五月安達憲忠（東京市養育院幹事）大草慧実（浅草別院輪番）の設立せるものにて其目的とする所は金銭の蓄へなく旅宿に宿泊することを得ずして彷徨困難せる者に止宿為さしめ俗に善根宿と称する  
…

通称善根宿は浅草の地に蓄えない者を止宿する宿として発足したわけであるが、それら利用者の多くは新政府の発足時に失職したもの、旧来の共同体の崩壊に伴い新しい貧困層であつたのはいうまでもない。

また設立当初より貧困層を底辺労働者層として明確にとらえ、それらへの対処の策が取られていたことを見逃すわけにはいかなない。そのことを無料宿泊所統計<sup>⑦</sup>の報告表1より読みとることができる。

表 1

業務を与へたる者	67人
養育院に入院せしめたる者	27
共済慈善会へ送附したる者	1
福田会へ入院せしめたる者	4
東京感化院へ入院せしめたる者	1
警察へ引渡したる者	2
止宿のみせめたる者	1,841
不 明	2
総 計	1,945

『宗報』2号（明治35年1月15日）

統計の数字で総計一、九四五人もさることながら、数のうえでは僅かながら業務を与へたるもの六七人が含まれていたことに注目しなければいけないだろう。もし当初よりこの六七人の業務を与へたるものがなければ、わが国の社会保障・社会福祉において最も根冠にかかわる事業とはなり得なかつたであろう。

また止宿人のなかで救護を必要とする者に対して、東京市養育院、共済慈善会、福田会、東京感化院などへ入院、警察への送致をおこないえたということは、「無料宿泊所」が単なる宿泊所ではなく、社会復帰、更生を当初より想定して設立されたことが充分理解できる点である。

またもう一点「無料宿泊所」が高度な理念のもとに発足したことを知ることのできる事柄がある。それは設立草創期に医学士栗本秀三郎<sup>⑧</sup>を招聘し、止宿人の治療にあたらせていることである。

ここで草創期の「無料宿泊所」の苦しい台所の状況を紹介してみよう。<sup>⑨</sup>わが国の慈善事業の大半に共通する苦しい状況から、慈善事業の草創の生む苦しみともいべきものを推測してみることができらるであろう。

収入の全てを寄附でまかなわなければならなかつた状況は不安定さきまりなく、運営面の困難さが充分推測できるわけである。慈善事業段階において全ての事業に共通していえたことは事業の拡大が

表 2

収入の部	金711円63銭
〈内 訳〉	
寄附	金710円 7銭
雑作売却代	金 1円56銭
支出の部	金677円29銭4厘
〈内 訳〉	
給料	金232円93銭 5厘
家賃	金179円99銭 9厘
布団(28人前その他)	金125円50銭5厘
印刷費	金 8円30銭
車代	金 12円35銭5厘
手当金	金 8円
違約金	金 5円
雑費	金102円74銭6厘
収支差引残	金 34円33銭6厘

『宗報』16号 明治35年11月1日  
(明治34年4月30日～明治35年4月  
マデの会計報告)

即支出にはねかえってくるわけで、財源が尽きれば事業は跡かたもなく消えるという状況にあったわけである。幸いに「無料宿泊所」は本山から下附金こそなかったが『宗報』<sup>⑧</sup>に同所への寄附の奨励している記事の記載をみることができる。

右宿泊所の経費として四恩瓜生会原禮子より毎月拾圓宛其他東京養育院商人護国寺等より毎月若干金の寄附あり……勧奨しつつありと

のちに「無料宿泊所」は本山から下附金の交付を受けることになるのであるが、設立された明治三四年、本山は多額の負債をかかえており、同年十月に臨時財務整理奨励局<sup>⑨</sup>を設け負債整理にあたっていた時でもあり、大草慧実としても本山に無心するわけにもいかなかったであろう。

更に表2に表わされている支出費目から「無料宿泊所」の業務・運営の内容についてみると、総支出の最も大きいものは人件費の費目で、高島健作幹事<sup>⑩</sup>に支払われたものと思われる。次に高い数値を示しているのは家賃の金一七九円九九銭九厘とあり、「無料宿泊所」は借家で開設されたことをもの語っている。次に高い数値を示しているのは布団二八組<sup>⑪</sup>その他の備品の費目であり、この点の費目以外にとりたてて大きな支出はなく、実に一年間の施設運営に関わる費目の支出は皆無に等しいといえる。このように慈善事業は極めて悪い条件下で実践されたかをもの語っている。

開所一年間の収支決算書にみるかぎり、慈善事業を起こすことの難しさを痛感するわけである。更に院内救助施設である東京市養育院では入院者の衣食住の生活全般をケアしていくわけであるから、その費用は莫大なものであったのはいうまでもない。明治期の財界の有力者渋沢栄一にしてこそできた偉業なのであろう。「無料宿泊所」開設者の大草慧実は莫大な債務をかかえた本山の一僧侶であり、その大草慧実がどのような救済の策を講じたであろうか、渋沢栄一の東京市養育院を夢想したのかもしれない。しかし実現できたのは「無料宿泊所」であったわけである。

「無料宿泊所」には宿泊所の提供と常駐職員以外には何も無く、利用者は自ら日雇収入を得て生活する以外に方法はなく、自立せざ

るを得ない条件が自然と備わっていたと考えられる。したがって日雇の労働に耐えられない老病幼者には、それなりの施設が必要であつたことはいまでもなく、当然その機能をもたない「無料宿泊所」は東京市養育院、福田会などの院内救助施設に送致するしか方法はなかつたのである。もし「無料宿泊所」が潤沢であれば、給食、授産を併設して利用者のニードに応えることができたであろうが、借家と寄附を唯一の財産とする「無料宿泊所」にそれを望むことはできなかったであろう。しかしむしろ施設内で授産所を設けたり、給食を実施しなかつた結果、利用者の全てに社会復帰する機会が与えられた。と新たな視点でみることはできないだろうか。「無料宿泊所」以前の慈善事業の施設形態は収容形態をとっていたのに対し、同所は徹底した利用施設形態であつたことに注目すべきであろう。「無料宿泊所」が財源がなく利用施設形態をとつたのか、当初から利用施設としての構想で設立されたのか不明であるが、現在のわが国の利用施設の原初形態であることには違いない。

## 五

「無料宿泊所」の職業紹介機能と役割について。利用者の年令分

布を表3<sup>④</sup>からみてみると利用者の大半が二〇才から四〇才の就労可能な年令層であることがわかる。

表 3

止宿人の年令別	
16才以上20才以下	216人
20才以上30才以下	1,098
30才以上40才以下	1,629
40才以上50才以下	794
51才以上60才以下	237
71才以上80才以下	46

『宗報』第83号(明治41年9月30日)

止宿人は日雇の職に就き、収入を得て生活をしていたのであるが、止宿人のなかから常雇され社会復帰していったのである。それら常雇者の雇用先を表4—A、表4—Bにみてみるができる。

表4—A、表4—Bは明治四一年上半期の職業紹介の実績を報告したものであり、伝統的な仕事に就いたものを表4—Aに、明治の産業革命以降に生まれた工場労働者(人足)とに分類されて報告がされている。分類されている伝統的な仕事と新しく登場した工場労働者(人足)との収入面を比較してみると、表4—Aにある仕事は大半が車力に代表される業種<sup>⑤</sup>は一日平均五〇銭であり、一方工場人足は一日平均三四銭と収入面で一日平均三〇—五〇銭と差はみとめられない。

表4—A

職人	2人
職工	1
職力	1
商業	1
商業	2
商業	1
商業	1
商業	3
商業	7
商業	4
商業	3
商業	2
商業	1
商業	1
商業	1
商業	5

『宗報』第83号(明治41年9月30日)

表4—B

電燈会社	4人
遠藤土工部	6
平野鉄工場	2
三益社	13
佐野鉄工所	3
坂本鉄工所	2
セメント会社	7

『宗報』第83号(明治41年9月30日)

また一日平均三〇—五〇銭の収入は決して高い水準ではなく、むしろ表4—Aに表記されている業種は下層社会の代表的な業種であつたことから、「無料宿泊所」で職業紹介を受け常雇となることが即貧困からの脱出を意味しなかつた可能性はある。それは公共職業安定所が近年ようやくその機能を發揮し、以前の失業と一体をなす暗いイメージから脱出したわけであるから、縁故採用の風習の

強い風土のもとではじまつた「無料宿泊所」の職業紹介は困難な大事業であつたであろう。

したがつて「無料宿泊所」職業紹介業務は底辺労働者を再生産していたといえないだろうか。わが国の発展はすそ野の広い底辺労働者の低賃金労働に支えられて発展を遂げてきたわけであるが、そのような体制づくりに加担した側面は拭えないだろう。しかしこのことをして「無料宿泊所」の業績の評価を低くするわけではない。

## 六

布教活動と慈善事業の接点について。明治四四年から翌年にかけて内務省地方局細民調査(表—5)から大草慧実が「無料宿泊所」を浅草の神吉町に拠点をおかなければならなかつた理由が浮き彫りとなる。

調査の細民の定義は

区費を負担せざる者にして人夫、車夫、日雇を業として月収二〇円以下若しくは家賃三円以下の家に居住する者

細民の数は不明な区を除いて、下谷区は最も多くの人口をかかえているが細民数は浅草よりも少ない。浅草は人口比に対し最も多く

表 5		
区名	人口	細民総数
麴 町	53,330	不明
神 田	163,223	不明
日 本	124,292	不明
京 橋	126,891	不明
芝	137,799	3,731
麻 布	73,530	2,622
赤 坂	47,994	500
四 谷	48,062	5,458
牛 込	114,549	1,200
小石川	111,528	18,762
本 郷	107,238	1,598
下 谷	179,910	36,073
浅 草	115,757	69,869
本 所	175,000	35,000
深 川	158,142	30,213
合 計	1,837,235	

中央慈善協会『慈善』第3編2号

の細民が多いことがわかる。浅草別院輪番大草慧実は布教活動、救済活動を当然想起できたことである。布教活動に関連する記事を『宗教』にみると、

本所開設以来毎夕篤志宗教家を聘し講話を聴聞せしめつゝ、ありしが本年一月中より蓮岡法麟専志此の広に従事せられる之れ肉体の困厄を救助すると共に心台の墮落をも防遏せんとするの趣旨に出たるなり

草創期蓮岡法麟が「無料宿泊所」での講話を一手にひきうけていたようである。明治四三年ごろより同所の業績がみとめられ内務省から下附金の下附を受けて運営も安定したところの講話について『宗教』は次のように報じている

教師差遣

六月十五日より当所の保護者に対し、慰安及教訓の爲め本山より文学士富岡教雲氏を差遣あり  
篤志者によつてはじめられた講話は蓮岡法麟に引き継がれ、明治四三年本山より公式に教師派遣を受けることになった。明治四三年をもつて「無料宿泊所」の充実、完成期として考えていいだろう。同年寺務総長大谷勝信の来訪、講話を受けるなどその充実した布教活動が展開された。

## 七

「無料宿泊所」の拡充期について。開設当初寄附金と借家とを唯一の財産として稼働をはじめた同所は、明治四三年には東京市からの補助金、内務省からの下附金の交付を受けて「第二無料宿泊所」を開所するまでに拡充した。開所式は明治三四年浅草神吉町で開所した時とは比較できないぐらい盛大におこなわれ、その様子を『宗教』は次のように報じている。

本年八月末迄に宿泊せしめし人員六万五千五百六十一人、職業紹介四千三百九十人に及びたるが、猶事務拡張の必要あるより、今回新たに深川区西町四一に第二無料宿泊所を開設し本月十八

日其開所式を行へり。來賓は渋沢男爵、長谷内務省参事官、市長代理、井上神社局長代理、市内名誉職其他百五十四余名……田川氏は東京市の事業としても窮民救済並に職業紹介所を設くる要あり、目下其協議中にて尾崎市長が欧米より帰朝次第具體的に発表すべき筈なりと述べたり

盛大に開催された開所式で注目すべきことは、東京市長代理田川氏の発言中に「無料宿泊所」を窮民救済と職業紹介所として位置づけて、東京市においても近々に着手したいと表明している点である。「無料宿泊所」運営の基準となつた「規則の大意」に明治四二年に明文化された一文がある。

失業者を工業会社、又は土工等の適当な場所に紹介し事務に就かしむる事

「無料宿泊所」は明治四三年の充実・拡充期を迎えてメルクマーは、窮民救済の善根宿から脱皮し、職業紹介所へと推移していた。職業紹介所は時代状況からの要請でもあり、当然社会、経済、労働形態にとって必須条件であつたといえる。東京市長代理田川氏の発言どおり明治四四年わが国で最初の公営職業紹介所が東京市の芝と浅草に設置された。政府は職業紹介所設置に補助金を交付し奨励した結果、大阪、京都、神戸、名古屋に設置され漸次設置されていくことになる。

大谷派内においても表6―A<sup>㉔</sup>、表6―B<sup>㉕</sup>のように相次いで名古屋、京都などに開設されていくことになる。

表 6―A

名 称	位 置	創 立	創立、経営者
第一無料宿泊所	東京	明治三十四年	大草 慧実 太田信次郎
第二無料宿泊所	東京	同 前	同 前
帝国救助院授産院	名古屋	明治四十年	堀田向道
愛知無料宿泊所	名古屋	大正四年	原 宜賢
島根授産院	島根県		
無料宿泊所	京都市	大正五年	大谷派婦人 法話会
岡崎無料宿泊所	岡崎市		北条 龍玄
授産会	山形県		菊地 秀言 外町内有志

『救済』第6編9月号（大正5年9月20日）

表 6―B

職業紹介所名	経営主体	予算額
浅草本願寺 職業紹介所	真宗大谷派 本願寺	二、六三〇円
江東 職業紹介所	無料宿泊所	六七四円
愛知 職業紹介所	無料宿泊所	一、八三六円

内務省 大正14年私立職業紹介所経費予算調より  
(東京・名古屋・大阪31ヶ所より大谷派関連を抜粋)

職業紹介所へと体裁を整えた「無料宿泊所」は大草慧実の慈善事

業の領域を越え、大谷派内の慈善事業の特色ある一分野へ成長し、さらには大谷派内の慈善事業の領域をも越えていくことになる。そして後に政府管掌の業務へと移管されていく経緯をたどる。その引き金となったのは大正七年前後の米騒動に代表される未曾有の不況にともない失業者を大量に生みだし、政府はその救済対策として職業紹介所設置の費用を低利融資で貸出し奨励したこともあり、民間の職業紹介所の急増期を迎えることになる。大正一〇年七月にわが国初の職業紹介法が制定され、漸次職業紹介所は政府管掌下へ移管され、公設の職業紹介所へと移管され、大草慧実のはじめた「無料宿泊所」は全国に設置された民間職業紹介所とともに幕を閉じることになるわけである。

しかし職業紹介所が政府管掌下に整備されるまでに果たした役割の大きさとともに、派内の慈善事業、社会事業への影響の大きさに注目しなければならない。

## 八

大草慧実の慈善事業と大谷派教団の慈善事業について。

特筆すべきは浅草別院大谷婦人法話会が明治三四年に大草慧実輪

番のもとうぶ声をあげていることである。浅草別院内にあった貴婦人会が改組、改称され大谷婦人法話会となったもので、その意義はのちに本山に大谷派婦人法話会として本部がおかれ、地方に支部組織をもつ大谷派内の組織へと育成されたことと、もうひとつは、慈善事業をメルクマールとした組織であり、大谷派の慈善事業に深い関係をもっていたということである。浅草別院でうぶ声をあげた同会的主旨は次のようなものであることを『宗報』<sup>⑥</sup>は報じている。

第一条 本会の目的は悲智円満なる仏陀の妙法を尊信し二諦相資の宗義によりて安心立命を得益善良の義徳を實踐し勉強して社会の弊風を矯正するにあり

(略)

第四条 本会は其目的を達せんがために事項を行ふ

一 毎月第二土曜日午後一時浅草本願寺に於て法筵を開き尚ほ徳望ある紳士淑女の講話を乞ふことあるべし

一 春秋二回大会を開く

一 慈善に関する事

のちに本山において結成された大谷派の本部規則を『宗報』<sup>⑥</sup>(第四九号、明治三九年一月二五日)にみると。

第三条 本会は二諦相依の教旨に基き専ら婦徳を涵養し来世の得脱を期するを以て目的とす

(略)

一 本会の發達に伴ひ慈善的事業を起し若しくは之を補助することあるべき

両規則にみるかぎり真宗の教義を慈善、慈善事業によつて遂しとげるべきであると理解できるわけである。若干の考察をするならば、一僧侶の一慈善事業がわが国の慈善事業段階から社会事業段階へ、そして社会福祉段階へと發展する経過と歩調を合わせて發展するわけであるが、わが国の發展経過のなかで中央慈善協会が果たした役割を、大谷派婦人法話会が果たしたわけである。大草慧実が先驅的に取りくんだ事業、組織づくりは政府の取り組むべき社会事業のモデルであつたかのである。事実大草慧実の足跡をたどるかのように政府は明治四一年渋沢栄一を会長として中央慈善協会を發足させるのである。

九

大草慧実と大谷派慈善協会設立経緯について。大谷派慈善協会は明治四四年四月に大草慧実輪番の浅草別院でうぶ声をあげている。その設立の経緯について『宗報』<sup>⑧</sup>は次のように報じている。

大谷派慈善協会（抜粋）

既報の如く、一派に於ける感化救済事業に関係ある有志者数十名相倚り、此程大谷派慈善協会を組織せり。右は本年四月二六日大遠忌法要中に開催せられし感化救済事業講演会に際し、法主台下の御教書の御趣意を奉じ、之が普及貫徹を期せんが爲……斯道の鼓吹に努めんとする趣旨より……

宗祖六百五十回御忌勤修された明治四四年四月一日～二八日の間に、内務省主催の第四回感化救済事業講習会が同年同月二六日に本山中で開催され、その折り法主台下の御教書を受けるかたちで有志が大谷派慈善協会を發足させた、それがすなわち浅草別院であつた。同年八月には古谷覚寿、南条文雄、稲葉昌丸、村上專精、小河滋次郎を顧問に、中央幹事に安田力、興地観圓、広陵了賢、河崎顯了、井上智月、武田慧宏、桑門典、沼波政憲、和田幽玄、蓮岡法麟に委嘱している。同年八月には「大谷派慈善協会規則」<sup>⑨</sup>が定められ体裁を整えたのである。大谷派慈善協会がメルクマールとした事業について「大谷派慈善協会規則」<sup>⑩</sup> 第四条では次のように述べている。

第四条 本会ハ左ノ事業ヲ行フ

- 一、既設ノ慈善救済事業ノ調査
- 一、将来設立ノ必要アル慈善救済事業ノ調査
- 一、一派内斯業当事者ノ有機的連絡統一ヲ計リ之カ調査ノ依托



ヲ受ケ且ツ其成績ヲ發表スルコト

一、定時又ハ臨時ニ巡回講話ヲナシ斯業ノ鼓吹普及ヲ図ル

一、毎月一回機関雜誌ヲ發行シ全会員ニ配附スルコト

一、毎年一回総会ヲ開クコト

一、地方斯者ト本山トノ間ノ中介ヲナスコト

既設慈善事業の調査、社会状況を調査し、その結果必要な新規事業の種別研究、大谷派内の慈善事業家の統一機関として、情宣機関として、機関雑誌の発行、本山と地方の仲介機関として発足した。

また本部を本山に、支部を浅草別院におき会長を教学部長とし、中央幹事、地方幹事を配置した派内の慈善事業の統一機関として発足をみている。大谷派慈善協会の活動は明治四四年四月に発足し、逐一その報告は機関誌『救済』に掲載され、今わたしたちは大谷派慈善協会の活動状況を『救済』誌より知ることができる。『救済』誌は大正八年二月号をもって終刊となっている。創刊から終刊に至る総目次を参照されたい。

大谷派慈善協会の設立は明治五年箕輪対岳<sup>⑨</sup>が着手した監獄教誨の流れと大草慧実の慈善事業との二大事業が統合された機関である。

大谷派慈善協会の流れは、大正十年二月武内了温を招聘して本山宗務機構に社会課の設置へと継承されたとみるべきであろう。そして昭和二七年に理事長梶鳥敏とする大谷派社会事業協会は現在全貌が

明らかにできていないが、明治・大正・昭和に至る真宗大谷派教団の慈善、社会事業の発展経過は一応このような流れであるといっているだろうか。

当該研究を通して大草慧実の慈善事業が大谷派教団にとっていかに重要な役割を果たした、かということを開掘できたことは大きな収穫であり、また大草慧実の慈善事業がわが国の社会事業史に大きな影響を与えたことを知りえたことも大きな喜びである。

#### 註

- ① 東京大谷派青年会『故大草慧実師略伝』（明治四五年二月四日）。
- ② 真宗大谷派本願寺寺務所文書課発行『宗報』第二号（明治三十一年二月一五日）二二―二五頁。
- ③ 『右に同じ』第八号（明治三二年五月一五日）二〇―二七頁。
- ④ 同志社大学人文研究所編『留岡幸助著作集』第一卷五三一頁。
- ⑤ 東京大谷派青年会『前掲誌』（明治四五年二月四日）二―三頁参照。
- ⑥ 『宗報』第二号（明治三五年一月一五日）七頁。
- ⑦ 『右に同じ』七頁。
- ⑧ 『右に同じ』第一六号（明治三五年一月一日）七頁。
- ⑨ 『右に同じ』七頁。
- ⑩ 『右に同じ』第二号（明治三五年一月一五日）七頁。
- ⑪ 柏原祐泉『講会の発展』（『近代大谷派の教団』昭和六一年七月一日所収）参照。
- ⑫ 『宗報』第一六号（明治三五年一月一日）七頁、「無料宿泊所」沿革を参照。

⑬ 『右に同じ』 第一六号（明治三十五年一月一日）七頁、「無料宿泊所」状況には二〇名を限り止宿を許すとあるところから、設立時定員は二〇名であったと考えられる。

⑭ 『右に同じ』 第八三号（明治四十一年九月三〇日）九頁。

⑮ 吉田久一「産業改革期の貧困」（『日本貧困史』昭和五十九年一月五日所収）参照。

⑯ 吉田久一「右に同じ」参照。

⑰ 吉田久一「右に同じ」参照。

⑱ 吉田久一「右に同じ」二六八頁、掲載の表を一部削除して使用。

⑲ 吉田久一「都市細民層について」『前掲書』所収、参照。

⑳ 『宗報』第一六号（明治三十五年一月一日）七頁。

㉑ 『右に同じ』 第九九号（明治四十三年一〇月二五日）一八頁。

㉒ 『右に同じ』 第九八号（明治四十三年九月二五日）二三頁。

㉓ 『右に同じ』 第九六号（明治四十二年九月三〇日）二六頁、規則の大要参照。

㉔ 大谷派慈善協会発行『救済』第六編九月号（大正五年九月二〇日）社会事業一覧参照。

㉕ 内務省社会局「本邦社会事業概要」（大正一五年）私立職業紹介所経費予算書より大谷派関連職業紹介所を抜粋。

㉖ 『宗報』第三一号（明治三十四年二月二五日）二七頁。

㉗ 『右に同じ』 四九号（明治三十九年一月二五日）大谷派婦人法話会（本部）規則より抜粋。

㉘ 『右に同じ』 第百一七号（明治四十四年六月二五日）二三頁。

㉙ 大谷派慈善協会発行『救済』第一編第一号（明治四十四年八月一五日）

碓井隆次編『類別 社会福祉年表』参照。

付『救済』総目次（第一編一号～第九編二号）

原典をそのまま収載することを原則としたが、読み易さの観点から、漢字は、新字体に改められるものは新字体に改めた。また仮名遣いも通例に改めた。そして明らかな誤字・誤植は訂正し、ママは用いなかった。以上の諸点を考慮し校訂した。

付『救済』総目次

第一編第一号

法主台下御教書

教学部長殿御祝辞

会説

時代の要求を論じて本会の設立に及ぶ

講演

宗教家に望む

免囚保護事業に就いて

宗教と感化救済事業

信念

徹底せざる信仰

自己の問題としての人生、宗教

雑纂

全生病院訪問実談

浮浪人の研究

予防は治療に勝る

仏教的看護婦養成に就いて

詞藻

内務省  
宗務局長  
司法省  
監獄局長  
内務省  
書記官

斯波 淳六郎

小山 温

中川 望

近角 常観

下井 香潤

蓮岡 法麟

沼波 政憲

武田 慧宏

大溪 専

俳句

彙報

時報 ○仏教講習会の開設 ○宣暢院の海外留学 ○浮浪者研

究会 ○仏教広済会の施療部 ○浄土宗の労働共済会 ○仏教主

義模範病院 ○濟世病院の近況

会報 ○大谷派慈善協会の経過 ○東京だより

第一編第二号

会説

他力信仰と慈恵救済事業

講演

地方宗教家に望む事共

公娼廃止に関する予の意見

犯罪予防上より見たる宗教

詞藻

俳句

雑纂

北海道授産場の一斑

万国人道会議と小児虐待防止会

彙報

時報 ○慈善病院の設立 ○関東地方に於ける天理教の勢力

奔蛇外二人

藤岡 勝二

片山 国嘉

小河 滋次郎

黒子 外同人

安田 力

武田 慧宏

○東京の司法警察事項 ○東京人の職業 ○実費診療所 ○各府  
県の地方病 ○最近変死傷者数 ○第五回花柳病講習会 ○石川  
県の神社数 ○布教講習生の実地見学 ○石川県下に於ける基督  
教信者 ○大谷春秋会の講習会 ○伝道会社の経済 ○浄土宗の  
火災保険業 ○基督教の新布教

会 説

教家慈恵事業の完成

講 苑

救 済

僧道の振興を望む

信 念

機に二あり

詞 藻

蝸牛会俳句

雑 纂

万国人道会議と小児虐待防止会

四恩瓜生会の施薬施療

貧 民

談 叢

感心なる仏教信者 大内 青 巒  
東西の慈善事業 小 河 博 士  
欧米社会の暗黒面 大 森 禪 戒  
梟 報

時 報 ▽万国赤十字総会 ▽万国食物衛生会議

▽青年団体組織調査 ▽自治制施行記念館

▽東京の警察 ▽娼妓の独立保護策

▽鉄道吏員療老院の設立 ▽浅草寺と診療所

▽春秋会研究会々務報告 ▽仏書出版の計画

▽神社局の新計画 ▽布教研究会の報告

▽第二無料宿泊所の記念会 ▽西本願寺の労働慰安会

入会者報告

第一編第四号

会 説

救済の意義を拡張せよ

講 演

精神病より見たる犯罪者

純潔なる慈善

信 念

寺僕の警策

大内 青 巒  
小 河 博 士  
大 森 禪 戒

三 宅 博 士  
佐 治 実 然  
石 川 了 因

雜纂

不良少年の宗教心

酒

無料宿泊所の一ヶ年

談叢

飲酒と性慾

仏教家と慈善事業

本源を浚へよ

児童と宗教教育

教育勅語の御旨趣を貫徹

するに最も有効なる方法

質屋の市営

詞藻

蝸牛会俳句

彙報

時報

協会記事

入会者報告

第一編第五号

会説

未開拓の研究領域

我邦に於ける古来の救済事業を研究せよ

講苑

特殊部落改善と宗教

泰西に於ける医薬伝道

雜纂

悪化の原因と宗教の感化力

万国人道会議と小児虐待防止会

談叢

特筆すべき慈善家

注目すべき社会現象

白痴と寝小便

食ふに困まる人々

下女の産地と性質

地方通信

金沢通信

滋賀だより

読者と記者

何人の筆になれりや

少年教会の組織如何

子爵

五島盛光

渡辺海旭

下井香潤

武田慧宏

井上友一氏

国民雑誌所載

石井亮一氏

東朝日新聞載

同上所載

安藤義導報

春愛義誠報

H T 生

玉山生

救済の副産物

断霞老人

詞藻

談叢

蝸牛会俳句

千四百年前の我が保育事業  
一粒米の功德

井上友一氏

彙報

慈善心に男女の別なし

堂屋敷岳海氏

時報 通俗教育の二規程、図書選択常設委員、政府明年度の

精神病学より見たる浮浪人

三輪田元道氏

予算、市立職業紹介の開始、仏国の死亡率と英国の出産率、

通信

三宅鉦一氏

無料の図書館、月島労働寄宿舎の落成、精神病院設立の計画、

尾三篤僧家懇話会

大溪專報

東京市公設長屋の開始、東京府の酌婦□、司廚矯風会発会式、

養育院巢鴨分院に於ける二時間

貧民堂報

朝鮮史講座新設、吉原遊廓の衰微内務省の□表彰、実費診療

詞藻

蝸牛会新年俳句

院の成績、教員優遇の内課、天王教大学の□万百円

入会者報告

彙報

第二編第一号

時報

会説

済生会事業方針、軍隊と娼妓問題、清飲料水課税、

医師と宗教家の協力

京都府会と済世病院、宗教的精神病院の建設、昨年中の犯罪と

講苑

検挙、婦人育児会附属病院、東京市の細民概数、市立簡易図書

現代文明と貧窮問題

京都帝国大学  
文科大学講師 米田 庄太郎

病者看護と宗教家

ドクトル 富士川 游

雑纂

第二編第二号

悪化の原因と宗教の感化力(二)

下井 香潤

酒

本多 慧孝

会説

大草慧実師を悼む

武田 慧宏

講 苑

人道の要は救済に存す

救済時言

雜 纂

天保年間飢饉救済事績(一)

口の無い人々

徳川時代の救済事業

談 叢

年少犯罪者処分

租税に就いて

火災は漸次減少しつつ、あり

児童図書館の前途

婦人渡米者増加

詞 藻

蝸牛会俳句

彙 報

時 報

聖恩島民に及ぶ、香花料下賜、福田会御下賜金、済生会の病院設立、特殊小学校後援会、楽石社の聾啞児救済、収容所設置反対、勤儉貯蓄の鼓吹者、振替貯金規則改正、廢物利用展覧会、一千五百万の鼠供養、奉送迎者入場資格、加藤弘之

真宗総合研究所紀要 第六号

氏の光栄、井上博士歓迎会、默雷師の一周忌、ニコライ師容態、

米国の総人口、米国の国際競技予選会、各国名士の手型

寄贈新著評

売笑婦研究

第二編第三号

会 説

農村荒廢

講 苑

貧民の研究

阿育王の救済事業

雜 纂

故大草慧実師の慈善事業に就いて

徳川時代の救済事業(二)

巡回看護婦に就いて

養育院から廢兵院の土曜

天保年間飢饉救済事績(二)

施薬救療に就いて

談 叢

死産は日本が最も多い

五左衛門の菩薩行

京都帝国大学  
文科大学講師

文学士

常 盤 大 定

本 多 辰次郎

東京市養  
育院幹事

大 溪 專

貧 民 堂

和 田 幽 玄

四恩瓜生会  
主 任

蓮 岡 法 麟

相馬医学博士談

大内 青巒氏談

玩具の心理

高島平三郎氏談

女性煩悶者増加

網島佳吉氏談

通信

福井だより

東京だより

詞藻

蝸牛会俳句

彙報

時報

総持寺へ御下賜金、香華料御下賜、地下の勤王志士へ贈位の恩命、三教会同、第二次三教会詞、教育宗教家の会同、大主教逝く、花環御下賜、ニコライ師の後任、衛生会の血精治療、鉉毒防止の実施、井上博士のお土産談、低能児特別教育、盲人数と按摩業、

第二編第四号

会説

仏教慈善の特色

講苑

福德舎に就きて

念仏の救済事業

雑纂

文部省囑託  
文学士

大谷勝真  
長沼賢海

犯罪救治の二大方法

安藤義導

天保年間飢饉救済事績(三)

和田幽玄

徳川時代の救済事業(三)

東京市養育院幹事

安達憲忠

この花見

貧民堂

談叢

葬式

多田鼎君

町村改良私見

加納子爵

通信

京都通信

下井生

北海道授産場

岐阜通信

東京だより

詞藻

蝸牛会俳句

咬菜会俳句

彙報

時報

女子の叙勲、本多庸一氏逝く、長谷川泰氏逝く、市設職業紹介所落成、新紹介所の開始、浜野氏の施米、改良されし特殊郵便、汽車の客に電報を差出す事が出来る、地方改良会、通俗教育講演会、新簡易図書館、結核患者で満員の市施療病院、大谷派慈善協会趣意書



第二編第五号

会 説

寺院坊守諸姉の地位

講 苑

念仏の物質的救済（承前）

救済事業視察談

雜 纂

米国に於ける最近浮浪人問題

天保年間飢饉救済事績（四）

窮民教養

談 叢

禁酒と法律

興味深き対照

新刊紹介

救恤十訓（小河法学博士著）

彙 報

時 報

救護事業御奨励

三井慈善病院の光栄

府県慈恵救済資金

真宗総合研究所紀要 第六号

公私立感化院

常盤病院の近況

昨年の警察成績

おびんづる様の取締

五百万円煙になる

世界各国元首の体重

第二編第六号

会 説

一派の信徒諸君に諒ぐ

講 苑

救済事業に就いて

念仏の物質的救済（第三回）

雜 纂

寺永慈恵院

社会生活と宗教

談 叢

メチールアルコールの中毒

景気回復の徴

穀価騰貴と農民及び労働者の迷惑

海外近事

法学士  
子爵

五 島 盛 光  
長 沼 賢 海

文学士  
寺 永 法 専  
安 富 成 中

医学博士 林 春 雄 君  
農学博士 横 井 時 敬 君  
法学博士 河 津 暹 君

万国優生学会議……生活費問題に関する新提議

……「カンサス」市の公安局

詞藻

蝸牛会俳句

新刊紹介

親鸞聖蹟

通信

秋田県の感化救済

彙報

時報 聖上御救血、——皇后陛下の御仁徳

済生会救療標準——施薬救療の開始

紹介所の近況——水難救済会総会

驚くべき犯罪数

会報

第二編第七号

会説

生活難に対する念仏行者の覚悟

講苑

念仏の物質的救済（第四回）

同盟罷工に就いて

畠山雷眠

雑纂

欧米社会事業一斑

徳川時代の救済事業（四）

南山寮の新緑

談叢

夏の祭

時間に対する觀念及道路に対する觀念の整理

神社会併の結果

生活難と機械工業

海外近事

人間及宗教前進運動……酒亭の理想的設備……

独逸の園亭部落……仏国に於ける婦人の新社会事業

……カンタベリー大僧正の貧民救済演説

詞藻

蝸牛会俳句

通信

寺永慈恵院の報告書

彙報

時報 窮民に職を与う——米価と土地改良

米価と郵便貯金——本邦学界の名誉

文学博士 建部 遜 吾  
東京市養育院幹事 安達 憲 忠

本多 慧 孝

姉崎 文学博士

添田 法学博士

山路 愛山 氏

河上 肇 氏

麦作空前豊稔―恩賜財団済生会の近事

貧民患者の福音―小学教師の肺病

平和協会の新計画

本会記事  
入会者報告

第二編第八号

会 説

謹んで追悼し奉る

講 苑

仏教史上の救済事業

同盟罷工に就て（承前）

雑 纂

欧米社会事業一斑（承前）

蜂須賀家政の駅路寺創立

少年共和国

談 叢

先帝に咫尺し奉りて

四十年如一夢

大行天皇陛下と仏教

明鏡の如くあらせらる

先帝御聖徳一端

史料編纂官

鷲 尾 順 敬

法学博士

桑 田 熊 蔵

建 部 遯 吾

諏 訪 強 哉

武 田 慧 宏

土 方 伯 爵

高 島 子 爵

大 内 青 巒

三 浦 子 爵

藤 波 主馬頭

歌聖としての先帝

タイムスの先帝頌徳

海外近事

伊太利各市の改良計画

万国失業者駆除期成会

近況一斑

詞 藻

蝸牛会俳句

新刊紹介

危期に富める青年及児童期（寺山文学士著）

通 信

愛知慈恵院の近況

彙 報

時報 御大故日誌外十五件

第二編第九号

会 説

免囚保護事業に就いて我同信の友に諒ぐ

講 苑

浮浪者の整理

仏教史上の救済事業（承前）

坂御歌所主事

小 河 滋次郎

鷲 尾 順 敬

雑纂

欧米社会事業一斑（承前）

建部 遯 吾

免囚保護事業に対する希望

寺 永 法 專

花野の蜷局

本 多 慧 孝

談叢

海よりも山よりも——活動せる宗教家

窪田静太郎 君

田舎の風俗に化する男の子と田舎を感化する女の子

横井 農学博士

龍宮城は琉球の王城

伊藤 理学博士

心の血を留むる秘訣

狩野 謙吉 君

説教よりも信用組織の効果が著しい

一木 法学博士

我邦の食料品の騰貴

大久保利武 君

欧州救済事業の始源に於ける四要素

小河 法学博士

詞藻

蝸牛会俳句第十集

通信

愛知慈恵会の近況——全生病院に赴任して——京都本部だより

彙報

御大喪日誌

時 報 奉悼歌、白字会の発展、肥料取締法改正、市内診療

所加設、自治体事務簡捷、生命の製造、細民部落の改善、諒闇中の国旗、内務省の表彰延期、救世軍ブース大將死す、在哇日本人の貯金、孤児海員の首途

第二編第十号

会説

大正教会の新使命

講苑

免囚保護の必要を論じ宗教家の努力を望む

監獄局長 谷 田 三 郎

真の宗教と救済事業

印度人 ブーマナンダ

雑纂

欧米社会事業一斑

文学博士 建部 遯 吾

秋風独語

冥 加 庵

生霊と死霊

貧 民 堂

談叢

乃木大將論

大將と宗教 井上文学博士

其の死は学ぶべき乎 加藤 咄 堂

至誠至直の一生 島田三郎

自殺の善悪は動機の如何なり 沢柳 大学総長

希くは大将をして瞑目せしめよ

三宅 文学博士

自殺は大なる権利なり

幸田 文学博士

十万の不良少年

花井 法学博士

白痴の生まれる第一原因は飲酒

池田 隆徳

各種職業と肺結核

中浜 医学博士

海外近事

米国少年共和国連合会―愛蘭に於ける婦人の衛生事業―

欧米社会事業一斑(承前)

文学博士 建部 遜吾

万国児童保護中央局―チュウリヒの万国社会週間―倫敦の婦人

喜ぶべき現象

冥加庵

収容所―優生学上の一問題―米国赤十字の創設者クラバルトン

生霊と死霊(承前)

恩赦余聞

嬢

談叢

詞藻

阿部 秀助 君

蝸牛会俳句 和歌

網島 佳吉 君

通信

三宅 文学博士

東京だより

山岡 万之助君

彙報

辻川 己之介君

御大喪記事

粒々の辛苦を思え

時報 英親王救恤寄附 外九件

救世軍の将来―希脳政府の社会的施設一斑ステッド記念宿泊所

第二編第十一号

加奈陀に於けるドウユボル宗徒―丁抹の飲酒制限法―児童保護局

会説

の事業

大正救済界の自覚

詞藻

蝸牛会句

本多 五 陵

鱈腹会句

手 島 精 一

詩

海外近事

彙 報

時 報 御大喪儀救護成績、舊天長節と東京、内務省の部落

独逸社会党近況―仏国の食糧問題―欧州諸国に於ける少年裁判所  
―本年中に開かれし重なる万国会議

改善協議会、予防協会設立計画、救済事業の表彰、勤労親交会の

詞 藻

事業、社会政策学会大会、支那赤十字社の成立、売薬規則改正案

小春日の窓

会報

蝸牛会俳句

第二編第十二号

会 説

通 信

先づ視察の風を盛にせよ

越後直江津より

講 苑

秋田新設感化事業紹介

救済に就いて(承前)

法学博士 小河 滋次郎

雜 纂

彙 報

欧米社会事業一斑(承前)

文学博士 建 部 遯 吾

感化救済事業講習会評判記

鯨 夢 生

北海道に於ける免囚保護事業の奨励

寺 永 法 専

談 叢

奇篤なる村長、力翁の大決心、浄土宗労働共済会現状、共済的職  
工病院、基督教の財団法人、犠牲的の慈善

職工組合の話

法学博士 堀 江 帰 一

生活難と新道徳

文学博士 遠 藤 隆 吉

会 報 疾罷 懇請会記事―入会者報告

第三編第一号

会 説

大正二年を迎う

講 演

社会体制と慈善事業

文学博士 建 部 遯 吾

雑 纂

欧米社会事業一斑（承前）

文学博士 建 部 遯 吾

巡回視察其折々

法学博士 小 河 滋次郎

お別れの日

本 多 慧 孝

先賢の遺蹟二三

佐々木 孤 月

救済事業に対する卑見

市 場 鴨 村

談 叢

日本人の死と生

医学博士 三 宅 秀 君

生活難の原因と救済策

男 爵 洪 沢 栄 一 君

我邦の生活難を救う道

文学博士 井 上 円 了 君

独逸諸都市の特長

内務書記官 中 川 望 君

大正の商工業的維新

外務省通商局長 坂 田 重 次 郎 君

米価騰貴に与うる利益

波多野承五郎君

世界各国々富及一人所得額比較

嶺 八 郎 君

海外近事

今年中に開かるべき重なる万国会議、欧州諸国の社会保険事業、

第一回独逸市制会議、バルカン戦後と米国赤十字社、米国基督教

青年会の社会改良論

詞 藻

詩 鱈腹会俳句 蝸牛会俳句 蝶の行く末

通 信

能登国慈善会創立

彙 報

時報 元旦の御下問外十四件 △会報

第三編第二号

会 説

其の近きものを採りて之を行へ

講 演

特殊教育に就いて

文学博士 龍 山 義 亮

信 念

真俗二諦の交渉

近 角 常 観

雑 纂

欧米社会事業一斑（承前）

文学博士 建 部 遯 吾

巡回視察其折々（承前）

法学博士 小 河 滋次郎

出獄者を信用せよ

自立会理事長 西 沢 善 七

癪病に関する研究

本 多 慧 孝

談 叢

社会の悪風潮と宗教家

伯爵 板垣 退助 君

丁抹は農業にて発展せり

法学博士 水野 練太郎 君

近事余談

法学博士 小河 滋次郎 君

露国最近の実業

森村市左衛門 君

海外近事

米国監獄改良問題、紐育市民共済の一例

パナマ地方に於ける基督教 年会の事業 雑件雑録

詞 藻

鱈腹会俳句 蝸牛会俳句 紫の花

彙 報

時報 △会報

第三編第三号

会 説

蓮師を現代に勧請し奉れ

講 演

青年犯罪者

藤 沢 正 啓

雑 纂

欧米社会事業一斑（承前）

文学博士 建 部 遯 吾

巡回視察其折々（承前）

法学博士 小 河 滋次郎

英国に於ける救世軍の社会事業

三 宅 丁照 訳

癲病に関する研究（承前）

本 多 慧 孝

信 念

真俗二諦の交渉（承前）

近 角 常 観

談 叢

修養に関する近時の傾向

文学士 吉田 賢龍 君

職業の貴賤

文学博士 中島 力造 君

都会に於ける家庭の長所短所

東京の土地問題

安 部 □ □ 君

優良□族の繁殖力

文学博士 松本亦太郎 君

結核の感染と体力

医学博士 北島 多一 君

海外近事

東洋の社会問題に関するヘンダアソン氏の使命

犯罪研究所設置に関するマクドナルド氏の提議

仏国の国民的危機

通 信

福井会報（佐々木浄鏡）京都本部だより（下井香潤）

余生病院の報恩

彙 報

時 報



第三編第四号

会 説

救済事業の権威

講 演

阿弥陀仏と君主

雜 纂

川路聖謨の慈善事業

巡回視察其折々(承前)

癲病に関する研究(承前)

救済と保護の効果

談 叢

我国教育の前途

女子教育に関する一謬見

児童貧富発育比較

欧米の新聞雑誌と人口との關係

日本の出火の十二原因

海外近事

万国社会保険独逸委員会 独逸通信官吏の家族状態

独逸購買組合の新事業、巴里に於ける結核病の防止と住宅問題、

医業国営論、英国に於ける改定低能児法案

通 信

恩赦囚出獄後の保護の状況

彙 報

時 報

第三編第五号

会 説

地方研究の風を盛にせよ

講 演

阿弥陀仏と君主(承前)

特殊部落に就いて

雜 纂

巡回視察其折々(承前)

英国に於ける救世軍の社会事業

癲探

女巡査

談 叢

排日問題の結局は東西両文明の融和に俟つ 伯爵

慈悲無尽講

八ヶ年間丘上で貝を吹く

生児孔養の心得

法学博士 寛 克彦

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

法学博士 小 河 滋次郎

欧州六大国の軍備

長谷川 天 溪

海外近事

米国南部社会学会議、仏国の少年裁判法、柏林の住居問題、独逸最初の少年監獄、独逸の音響取締規則

詞 藻

詩 鱈腹会俳句

通 信

沖繩県自営会成績報告

彙 報

時 報

第三編第六号

会 説

浄土真宗の矯風の威力

講 演

欧州に於ける救済事業の傾向と吾人の反省  
特殊部落に就いて（承前）

大 森 禪 戒  
小 河 滋 次 郎

雑 纂

巡回視察其折々（承前）  
癡探（承前）

法学博士 小 河 滋 次 郎  
本 多 慧 孝

見たま、聞いたま、

宇 南 生

談 叢

神道より見たる農業神聖論

法学博士 笥 克彦 君

丁抹で眼に付く三つの事

法学博士 一木喜徳郎 君

飲酒に関する統計

薬学博士 石津 和作 君

微から起る病気の防ぎ方

医学博士 樫田 十次郎 君

海外近事

瑞西の貧民取締規則、伊太利少年法草案

児童の健康増進に関する新計画

米国基督教青年会地方部の事業

詞 藻

鱈腹会俳句

彙 報

時 報

第三編第七号

会 説

報恩思想の反映

講 演

欧州に於ける救済事業の傾向と吾人の反省（承前）

特殊部落に就いて（承前）

大 森 禪 戒

法学博士 小 河 滋 次 郎

雜纂

巡回視察其折々（承前）

法学博士 小河 滋次郎

陰徳美談

和田 生

談叢

書齋独語

幽 玄 生

都市の音響問題

宮川 鉄次郎君

教育盛にして農村愈々衰う

熊谷 繁三郎君

貧民住宅問題の先決問題

安達 憲忠 君

統計に現れたる我国文明の長短

海外近事

海外近事

イリノイス大学のリンコルン記念大学院

米国児童局の事業、大学生の社会事業、優生学と其実施運動

ペンシルヴァニア州に於ける慈善設営

詞藻

低能者教育に関する新計画

鱈腹会俳句

欧州共同組合近事

通信

談叢

大島療養所視察報告

斯波 貞吉 君

無料宿泊所だより

田中 穂積 君

彙報

安部 磯雄 君

時報

高橋 秀臣 君

第三編第八号

詞藻

会説

鱈腹会村山会連坐

宗教の社会化と俗化

通信

真宗総合研究所紀要 第六号

網走寺永慈恵院事業成績報告

彙報

時報

第三編第九号

会説

僧侶の働く働かぬの説について

講演

明治初年の回顧と仏教慈善の意義(下)

雑纂

我国固有の赤十字思想

細民の救済私観

祝の謡

私立徳風幼稚院の沿革及其の経営

海外近事

米国医学校と工業衛生、農村改良の新設備、少年共和国の発達、

紐育職業指導協会、欧米婦人界近事、逝けるサミエルバアネット氏

談叢

地方振興は当面の最大急務

賃金が低くて物価の高い日本

工業地たるの三要件と其最必要一件

日本特有の不徳義

稲田に飼養する鯉

逸す可らざる大富源

現代学生の気質

我国幼年犯罪者の総数

詞藻

鱈腹会俳句

通信

福井だより、九州療養所はどんなものか

彙報

時報

第三編第十号

会説

仏教家の免囚保護事業

講演

日本の社会階級

雑纂

我国に於ける赤十字的事蹟

慈善事業の行商

海外近事

湯原 元一 君

下 啓助 君

農学博士 本田 幸公 君

北條 時敬 君

法学博士 豊島 直通 君

文学士 長 沼 賢 海

沼 波 政 憲

雨 峰 生

稲 垣 實 秀

文学士 田中 穂積 君

安部 磯雄 君

野田 保興 君

文学博士 遠 藤 隆 吉

文学士 長 沼 賢 海

文学士 長 沼 賢 海

文学士 長 沼 賢 海

文学士 長 沼 賢 海

文学士 長 沼 賢 海

ハアグ平和宮殿完成

活動写真に関する奥国新令

談 叢

上を見習う日本国民

日本の家屋の部屋の大さと国民性

日本にない保険の話

労働争議

詞 藻

第三十七回鱈腹会俳句 第三回連座句集

勸説(本多慧孝)

通 信

全国免囚保護事業代表者会議

第二区療養所北部保養院とは何んなものか

会 報

法主台下の御下賜金 外二件

彙 報

時 報

第三編第十一号

会 説

奥田文相の宗教家招待の席上に於ける演説

真宗総合研究所紀要 第六号

講 演

地方改良と真宗の関係

雑 纂

我国古来の赤十字思想

布施宗の経典

慈善事業経営に就いての私見

教 大

布教講習会雑誌

談 叢

青年思想の五大傾向

理想の都会小学校

恐怖の身体に及ぼす影響

迷信中の科学的真理

現経済制度の三大弊害

沙翁の処世要訓

農村振興策

海外近事

海牙平和会議と英国労働党、昨年の仏国離婚数、気候の変動と移

住との関係、倫敦の忘れな会昆虫の不可思議

詞 藻

文学士 長沼賢海

常盤大定

房岡義成

本多慧孝

深作安文君

バルトン、ヘンドリック君

某大尉

広本多三君

気賀勸重君

高田大観君

橋本農商務次官談

第三十八回鱈腹会俳句

彙報

会報 時報

第四編第一号

新年の辞

酒害と仏教家の覚悟

他力信仰に対する現代人の態度

地方改良と真宗の関係

初めて演壇に起ちし時の懐旧談

感じのまゝ、

家庭の生み出す浮浪人

海外近事

画間感化院「ドルリー、レーン」愛知学園主事

蟲蟲吟

少年に施すべき宗教々化の必要を論ず東京養育院  
教誨師

少年裁判所の話

滋賀県阪田郡改善事業報告概要  
南郷里村千草

時報

第四編第二号

主観満足の慈善を排す

社会救済の根本意義

犠牲的精神の必要

地方改良と真宗の関係(承前)

海外近事

少年裁判の話(承前)

愛知学園便り

沖繩の教状

浮浪労働者の研究

俳句

高原より(其二)

教大

訪問日誌

時報

本会記事(入会者報告)

第四編第三号

家族制度と宗教

古徳の救済事業

第一に我が身

少年裁判所の話(承前)

細民部落視察談

法学博士 堀江 帰一

文学博士 村上 専精

富山県理事官 下村 寿一

教誨師 武田 慧宏

全院保母 山岸 たつ子

養 海

伊 藤 生

菱 川 生

全生病院教誨師 本多 慧孝

岳 陽 生

主 不 英

伊 東 思 恭

房 岡 義 成

武 田 慧 宏

文学博士 南 条 文 雄

住 田 智 見

教誨師 武田 慧宏

紐育窮民改良会七十年会

満洲詩程

碩果 南条文雄

東北九州救済並慰問計画の種々

□ 風 生

良心の呵責

教誨師 安藤義導

教大(承前)

全生病院教誨師 本多慧孝

時報

本会記事

第四編第四号

皇太后陛下を悼み奉る

救済事業の主脳機関を求む

我国古来赤十字的事蹟(承前)

孤貧児に対する衛生上の注意

文学博士 長沼賢海  
医学博士 二木謙三

盛徳のみあとたづねて

房岡義成

癩患者と社会政策

全生病院教誨師 本多慧孝

爆発と救済

松本雪城

救済事業に就て

市場鴨村

良心の呵責(中)

教誨師 安藤義導

福田育児院を観る

丁英生

褒花集

圭不英

時報

第四編第五号

悪疫及飢饉の与えたる教訓(会説)

我邦の救済事業に就て

龍山義亮

大赦特赦及刑の執行猶予に関する禁酒法案

片山国嘉

昭憲皇太后陛下を送り奉りて(その一)

房岡義成

その二

本多慧孝

その三

村上專精

新らしき布教上の要求

本多慧孝

嗚呼興地觀田君

武田慧宏

良心の呵責(下)

安藤義導

愛知学園便り

時報

第四編第六号

仏教徒社会事業家大会出席諸氏に与う(会説)

衆議院議員

田中善立

余が政界に入りし動機

寺永法專

免囚保護事業の急務

岳陽生

全国仏教徒社会事業家大会記事

文学博士

村上專精

政治的社会事業と宗教的社会事業

文学博士

大内青巒

推古式仏教

房岡生

偶感片々

英国の教誨軍に就いて

光明皇后

保護事業に着手して

△△君へ

追悼一乘院吉谷覺寿講師

影法師

野田町だより

時 報

第四編第七号

慈善事業の權威（会説）

感化事業の改善

木賃宿の改善論

免囚保護事業に関する吾人の立場

東京養育院年報を読み

東海道から中山道へ

時 報

第四編第八号

各宗当局者に望む（会説）

犯罪人救済と監獄

未成年受刑者の処遇法

武田 慧宏

山名 菱川

下井 香潤

竹中 生

（碩果）

南条 文雄

不圭 英

和光 堅正

奈良県女子師範学校校長

龍山 義亮

市場 鴨村

武田 慧宏

房岡 岳陽

丁英 生

木賃宿の改善論（続稿）

東京市細民子弟の教育

晦日の訪問

ジョセフ、ダミエン尊者

如何なるものを如何に保護救済すべきか

安房だより

無料宿泊所大正二年報

亡友の三年を迎えて

時 報

第四編第九号

宣暢院連枝の御帰朝を迎う（会説）

宗門教育に於ける社会事業の研究（会説）

欧米巡遊に就いての所感

感化救済事業者に望む

教行信証と歎異鈔に就いて

田舎の寺院より

救済協議会

秋の運動会

時 報

第四編第十号

市場 学而郎

坂本 龍之輔

丁英 生

山鳥の 尾はり

畠山 頼民

蓮岡 法麟

沼波 政憲

菱川

大谷 瑩韶

安藤 正純

住田 智見

一寒 生

岳陽 生

天外 生

天



救済事業者の待遇問題（会説）

欧米社会事業視察雜感

盲人の取扱について

青巒清話

内務省感化救済事業講習会聴講記

免囚保護協議会及講習会記事

ジャン・バルザンと云ふ人

銷夏之旅

時 報

第五編第一号

乙卯年頭の感懷（会説）

救済事業をして翻訳的ならしむる勿れ

医学博士男爵

高 木 兼 寛

監獄事務官

真 木 喬

免囚保護会に就いて

文学士

本 多 辰次郎

低能児教育に就いて

文学士

石 川 履 信

公衆は犯罪の協働者

佐々木 淨 鏡

救済事業に対して殊に赤裸々なるを要す

市 場 鴨 村

犠牲者良水と其事業

本 多 慧 孝

どん底に呻吟せる青年の後悔

真宗総合研究所紀要 第六号

山茶花

是空銷夏之旅

時 報

第五編第二号

立憲道德と真宗教徒の自覚（会説）

現代思潮と人格的教育家

宗教家の感化救済の事業経営

東照公の家訓

個人主義か家族主義か

藪入日記

是空銷夏之旅

時 報

第五編第三号

此の動揺せる思想を何と見る（会説）

生活難脱却法

東京市養育院幹事

安 達 憲 忠

一日の要訣

東京帝国大学講師

常 盤 大 定

徂徠の「政談」に現れたる浮浪遊民救済策

和 田 生

花の中から

岳 陽 生

花曇の午後

宇 南 生

大正三年度に於ける無料宿泊所

天 蘭 生

菱 川  
天 外 生

丁 英 生  
岳 陽 生  
天 外 生

平 松 香 雨  
房 岡 義 成  
児 島 時 中

大正三年度自立会保護成績

養育院

下井生  
伊山

社会的慈善（免囚保護事業）  
東京市養育院巢鴨分院に於ける児童の心身状態に就いて  
加藤咄堂

時報

第五編第四号

青年仏教家の覚醒を促す

下層労働者新慰安策

犠牲者良水と其事業

德育及其方法

徂徠の「政談」に現れたる浮浪遊民救済策

大谷派慈善協会記念講演会

美術光筆書画展覧会短評

ドクトル・ヘンダーソンの死去

社会事業研究会例会

愛知学園ノ近況

自立会

会報

時報

第五編第五号

本会の規則改正に就いて（会説）

感化教育制度の改善に就いて

龍山義亮

夏的生活  
東村山村の悲田所

全生病院長  
光田健輔

児童に及ぼすべき宗教々育  
人生即戦  
疾病と不良少年  
都会病と其結果  
濁酒密造の矯正につき秋田教務所管事通達  
社会事業研究会  
東京日より  
会員消息  
広告  
本田大猷

第五編第六号

社会衛生と宗教家（会説）

文明的経営の根底  
可憐部落改善談  
我邦に最も適當する疾病保険制度は如何なるものなりや  
東京市養育院主事  
小澤一

法学博士  
志田鉦太郎

八淵蟠龍

岳陽生

岳陽生

竹鼻尚友

房岡義成

旅立

自立会保護状況報告

社会事業研究会

会員消息

編輯便り

第五編第七号

大典紀念事業と其精神（会説）

救済事業と浄土真宗

文明的経営の根底

動物愛護に就いて所感を述ぶ

人生即戦争

巢鴨監獄満期釈放者について

教誨余感粟の穂

教の友へ

青年自殺の径路

さびしきころ

善い真似の会

編輯便り

会員消息

第五編第八号

真宗総合研究所紀要 第六号

伊山

下井生

会長 大谷瑩韶

東京養育院副幹事

小沢一

山名龍宣

本田大猷

武田慧宏

沼圭生

岳陽生

宇南生

菱川

畠山頼民

児童教養と青年の修養（会説）

古徳の慈善

万国仏教大会出席所感

釈放後の教化

人類滅亡の傾向（承前）

日曜学校経営の注意

放浪の生活

社会事業研究会

自立会保護状況

編輯便り

会員消息

第五編第九号

慈故能勇

浮浪人の科学的研究

日本仏教と済世利民

恩赦の貫徹について

画間感化院設立の必要

養老賑恤の御沙汰書と愛知場の敬老会

絵の具皿

免囚保護について

浅草本願寺輪番

仏教青年会代表者

召圭生

本田大猷

房岡義成

岳陽生

下井生

南条文雄

京都帝大講師

真宗大谷大学  
図書館長

米田庄太郎

山田文昭

武田慧宏

伊藤思恭

大溪専

六三

畠山雷眠

真個報恩の事業

会報

第六編第一号

会説

会長 大谷 瑩 韶

慈善事業に就いて

内務大臣法学博士 一木 喜徳郎

欧洲戦争と救済事業

東京府知事法学博士 井上 友一

当事者と修養

文学士 龍山 義亮

時局漫筆

松本 白華

仏教婦人団の事業に就いて

江東 学人

日曜学校と児童教会の経営は如何にすべきか

中外日報記者 井上 淡星

表彰せられたる育児院の事蹟

桜花義会々長 大溪 専

保健調査新事業（上）

医学士 野田 忠広

無慈悲と不良少年

東京全生病院だより

東京全生病院教誨師 本多 慧孝

漫語録片々

甲良 徳雄

人生行路の図解

一六 坊

彙報

編輯だより

第六編第二号

会説

徹底せざる救済事業

会長 大谷 瑩 韶

真宗の教義より起る社会救済の思想

天 蘭 生

再び仏教徒の大覚醒を促す（上）

河野 純孝

表彰せられたる愛知育児院長の事蹟（其二）

山崎 嶽充

全生病院少年教会だより

大溪 専

児童教会に対する雑感

本多 慧孝

漫語録片々（承前）

香川 千巖

公德の訓練

甲良 徳雄

社会改善の要

労働者徴兵反対

寒夜無料宿泊所を訪う

子供の悪戯は小児の自己教育

彙報

本会々計報告

第六編第三号

教誡の起源

住田 智見

社会事業研究私議

阪 埜 良全

日曜学校と婦人会の連絡

羽賀 彰一

表彰せられたる愛知育児院長の事蹟（其三）

大溪 専

本生譚に訓うる道

淳心園

興行地の教育

活動写真と子供（京都）

活動写真と子供（大阪）

広島  
高師 活動写真調査

ジゴマの流行

福岡だより

第六編第四号

人格と事業

救済

律道と真宗

癪療養と懲戒及び検束

真の意味の救済事業

児童教会に就いて

表彰せられたる愛知育児院長の事蹟（其四）

人生は教育

大都会の児童

児童の新時代

彙報

広瀬南雄

編輯便り

第六編第五号

救済ということ

救済の精神

此欠陥を救ふは誠意あるのみ

救済の内容

七人集

犯罪と環境

越後感化救済事業近況

死に、行く人の懺悔

養老賑恤の御沙汰書と愛知県の敬老会（中）

衰弱せんとする農村

雑報

第六編第六号

畠山雷眠君に答えて本会の立場を明す

養老賑恤の御沙汰書と愛知県の敬老会（下）

地方寺院と新事業

未見の手

農村と青年

農村美術教育振興論

本場了本

広瀬南雄

菅原法嶺

瓜村

原卓一

横田常力

大溪專

会説

大溪專

本田大猷

碧鞋洞

高橋平三郎氏

青柳猛氏

遊廓廃止論

同上

香水は慈善事業

惨事多き梅雨期

井上博士

会報

編輯室より

第六編第七号

救済事業とは何ぞ

会説

感化事業とは何ぞ

同上

英国感化事業視察談(上)

会長 大谷瑩韶

感化事業の概要

本田大猷

英国の感化事業一斑

法学士 穂積重遠

信仰問題と人生経験

本田大猷

腺様増殖に就いて

医学博士 吉井丑三郎

犯罪捜査は消極的たれ

青柳猛氏

生活の程度と社会の進歩

感化院参観の印象

甲良松鱗

内務省主催講習講聴講記

大谷派児童教育規則大要

編輯だより

第六編第八号

宗教心の培養

会説

宗教々育と児童

会長 大谷瑩韶

日曜少年教会の実際

為郷世淳

宗教々育の場所と方法

本田大猷

日曜学校に関する雑感

房岡義成

小学校との連絡に就き

高橋禎祥

讃仏歌集

児童期に於る宗教意識の発達過程を論じて

安藤専哲

日曜学校の実際に及ぶ

東京だより

会報

編輯だより

第六編第九号

御教書

緒言

社会事業一覧

青年会

婦人会

特殊布教

免囚保護事業

矯風事業

貧民教育

養老及貧民救済

幼稚園

授産、無料宿泊及職業紹介

施薬救療

育児事業

学校

文書伝道

備考

第六編第十号

英国感化事業視察談（下）

結婚と血統

思想の新旧

仏式結婚案

家庭と不良少年（上）

疾病迷信と宗教

東京だより

編輯だより

第六編第十一号

真宗総合研究所紀要 第六号

会長 大谷 瑩 韶

本多 慧 孝

本田 大 猷

文学博士 井上 円 了

内務省嘱託 生 江 孝 之

医学博士 藤 浪 鑑

藤 井 い は ほ

青年団体に就いて

地方改良の要件

宗教家の猛省を促す

道徳教育の根底としての宗教々育

青年の心理

青年団体訓令因解

宗教家の奮起を望む

青年会の本領

家庭と不良少年（下）

東京だより

一言万語

編輯だより

第六編第十二号

歳は將に暮れなんとす

亜米利加に於ける労働児（上）

地方改良私見

工場法に就いて

社会の闇黒面

蛇 籠

一言万語

会長 大谷 瑩 韶

阪野 良 全

本田 大 猷

安藤 専 哲

文学博士 藤岡 勝 二

文部省督学官 乗杉 嘉 寿

法学博士 小河 滋 次郎

内務省嘱託 生 江 孝 之

藤 井 い は ほ

会長 大谷 瑩 韶

会 説

阪 埜 良 全

古 瀬 安 俊

農商務省工  
場監督官  
司法省  
監獄局長

谷 田 三 郎

東京市民食料の傾向

東京だより

会 報

編輯室より

第七編第一号

亜米利加に於ける労働児(中)

会長 大谷 瑩 韶

犠牲者良水と其事業(承前)

本 多 慧 孝

信仰の妙味

理学士 石川 成章

社会救済の根本事業とは何ぞ(二)

宇治谷 丁 嶽

『讃仰歌』を讀みて

一 条 千鶴子

眞の生活の価値

宮 崎 虎之助

貞操と家庭の平和

東京女医学校長

吉 岡 弥 生

東京の空より

藤 井 いはほ

會計報告

編輯室より

第七編第二号

亜米利加に於ける労働児(下)

会長 大谷 瑩 韶

犠牲者良水と其事業(承前)

本 多 慧 孝

救貧と防貧

原 宜 賢

社会救済の根本事業とは何ぞ(二)

宇治谷 了 獄

地方改良意見(三)

奇跡と御伽噺

『讃仰歌』を讀みて(補遺)

トラクト隊の日記より

愛知無料宿泊所報

東京出獄人保護所第二十年報

日曜学校経営法

編輯室より

第七編第三号

本 領

宗教々育と児童(上)

会長 大谷 瑩 韶

摘 草

本 田 大 猷

東都の空より

藤 井 巖

談 叢

子供を学校に入れる時の心得

笹 野 豊 美

話方の研究

岩 村 清四郎

お伽噺の組織及びその仕方

常 光 浩 然

子供の褒め方と叱り方の研究

高 島 平三郎

児 童

日曜学校経営法(その二)

晴耕雨読楼主人

阪 埜 良 全  
藤 井 巖  
一 条 千鶴子  
不 卻 生



基督教日曜学校生徒大会を見る

むらさき

法話会日曜学校春季大会

編輯室より

編輯室より  
第七編第五号

本 領

第七編第四号

本 領

日本の精神界と仏教徒

男爵 渋 沢 栄 一

社会救済の根本事業とは何ぞ (三)

宇治谷 了 嶽

『人殺し』の嫌疑から (上)

藤 井 いはほ

特殊部民の救済

七 宝 山 人

摘 草

本 田 大 猷

談 叢

文学博士 前 田 慧 雲

大正六年の教界に望む

同 上

十八世紀式の説教では追付かない

文学士 木 村 泰 賢

宗教家の奮起を促す

文学士 吉 田 静 □

宗教革新論

文学士 鈴 木 美 由

宗教革新論

文学士 鈴 木 美 由

児 童

日曜学校経営法 (その三)

晴耕雨読楼主人

花まつりの記

会 報

真宗総合研究所紀要 第六号

編輯室より

第七編第五号

本 領

宗門学制改革問題 (上)

会長 大 谷 瑩 詔

△布教方法の根本的誤謬

地方改良意見

阪 埜 良 全

『人殺し』の嫌疑から (下)

藤 井 いはほ

手帖の中より

本 田 大 猷

談 叢

岸 本 能 武 太

宗教の衰うる理由

安 田 善 太 郎

仏前結婚を奨励す

佐 治 実 然

結婚と信仰問題

佐 治 実 然

大正時代の珍現象

佐 治 実 然

児 童

日曜学校経営法 (その四)

晴耕雨読楼主人

お伽嘶慈悲深い皇子 (上)

一 条 千 鶴 子

安東県仏教日曜学校だより

第七編第六号

本誌の新発展に就いて

□本誌の歴史 □教界の風潮 □本会の目的 □要約

宗門学制改革問題

苐摘み

新發展号予目

日曜学校経営法

第七編第七号

眠と微笑

三つの疑問

幸福論(上)

幸福の二方面

幸福を求むる前に考へよ

大事業の根本精神

何が眞の幸福か

天使の遊び

恐るべき刃

求道の用意

宗教に縁ある植物の話

基督教と月桂樹

神道と榊

香を聞くということ

蓮華の代りに榊

晴耕雨読楼主人

タゴレ

会長 大谷 瑩 韶

文学博士 谷 本 富

青黄赤白四種の蓮華

口と胃袋鼻と肺

握飯の問題

歌人蓮月尼の生涯(上)

彼の女の生立ち

「歌ノ 歌ノ」

田も歌も一処に作れ

人生無価の実

蓮月と鉄斎

恵みの糧

教えの両面

あなたのお嬢さまへ

子供に話して聞かすには

手帖の中より

独 語

教界笑話

話し道楽

煩悶なくさめ会

仲よく暮すに大事な心得

名古屋支部発会式

お華迄も持つて来た

三毒五欲芬陀利華

真宗京都  
中学教授

安 藤 州 一

田 川 草 人

大阪徳風  
小学校長

擬講

中 城 正 城

本 多 主 馬

そ よ か ぜ

児童協会幹事

碧 蛙 洞

微 風 生

龍 車 蟬 螂 生

一 記 者

本会事業略報

通信

新たに本誌の発送を受けられた方に

第七編第八号

救済日訓

人を導く心得

幸福論(二)

男は女の装飾である

アンニーは唯一人

無理からぬ望み

私の良人ばかりは

可愛いそうなのは二人の子

救いの手

人生は絢なへる縄の如し

婦人の力

信を求むる人に

三種の門徒

自身の一切を挙げて如来

本願の婦人するより外に

吾等安住すべき処はない

真宗総合研究所紀要 第六号

如来の本願

自身の問題としては

仲々会得はむつかしい

青年と断行力

歌人蓮月尼の生涯

御歴々のお揃ひ

長持一棹の身代

海人の刈藻

大仏のほとりに夏を結びて

ルイゼ皇后の話

少年会の迫害史

初めた動機

子供達の家庭

六ヶ月は順調時代

青天の霹靂

十ヶ条の異議

五月蠅いほど嘆願

基督教の日曜学校

仏祖への御奉公

煩悶なぐさめ会

理学士 石川成章

田川草人

文学博士 谷本富

会長 大谷瑩韶

大阪府知事 大久保利武

本会一幹事

大谷派児童教会長 大谷瑩韶

石井護冥

仲よく暮らすに大事な心得

池原講師の事ども

手帖の中から

児童教会通信欄

読者から本部から

前月号目次

第七編第十号

心の誓ひ

地方青年の現状

信をとるなら斯うして取れ

僕等の努力

一等大事な処

脳と寝返り

求道と青年

鼠と蛇との話

喘ぎ／＼登れ

幸 福 論 (三)

訓練の光輝

矢のように催足

明日なる返答

山岡鉄舟

会長 大谷瑩韶

本会幹事

文学博士 谷本 富

学師 蒼 溟 穹

子供は風の子

天使の運動場

貯金壹千五百円

役員は家庭の人々

風間家の信仰

春山さんの態度

頭が廻れば尾が廻る

家内仲よく暮らすに大事な心得

家庭のいろいろ

依頼心を起すな

干渉しすぎるな

笑うことを稽古

最後に信念

栖鳳画伯苦心七年

日曜学校入門

至極最も頼み状

時節到来

涙の欠乏

大膽に構えろ

一挙兩得

村井銀取

大谷派 某名家夫人

村井 吉兵衛

かまきり

花まつり生

若き宗教家の煩悶

煩悶なぐさめ会

日本の進歩

日本の退歩

あなたの坊っちゃんに

こうこうの花子

日曜学校の事務的方面

手帖の中より

独 語

読者の声

第七編第十一号

救済日訓

扉を叩く時代の声

信に到達する順路

唯の一度

つまらぬと思う事

力強い豊かな声

山寺の和尚の話

その山寺の小僧の話

古今先達の指導

真宗総合研究所紀要 第六号

磯の松風

N 布教師

大 朝 子

大 毎 子

五 明

須川 せつ子

亀淵 観 励

碧 蛙 洞

そよ かげ

会長

二 宮 尊 徳

大 谷 瑩 韶

本 会 幹 事

心の富は必ず得られる

良書は最良の朋友

信の人を直接叩け

幸 福 論 (四)

至誠の応現

△視察の発端

△二個の首脳者

△名は以て質の賓

△斯業の大賊

△将来の偉大方式

十年経てば三千坪

親子の不和は親が原因

表彰されるが不思議

不和は独立の出来る頃

原因は遙か本源にあり

その罪全く親にあり

自然のまゝに育った子

教育の理想と現実

愛は永遠の平和

失敗に終りし施設

文学博士 谷 本 富

一 記 者

△彼の理由は着々実現

△主義に殉ずる大丈夫

△主婦としての職工教育

△波多野社長の経歴

△□に結んだ糶粒

横浜市西  
前校訓導

か ま き り

沢 辺 かねよ

飯田少年  
会主任

石 井 護 冥

日曜学校入門(二)

花まつり生

六日の菖蒲

「信」が活動の原理  
アルプスの材

宗教百年の大計

結

国民の単位は個人

幸福論

自分の影を写したい

三部経の中の動物の話

よろこびの教育

誰でも考えのつく事

煩悶なくさめ会

日布教師

動物から見た上下二巻

或看護婦の煩悶

花園つた

大経は哺乳類観経は鳥類

欧州大乱切抜新聞

大朝子

進化論の考える事

徹底せる二労働青年

同上

若し空中へ逃げたら

森羅万象みな親子

名古屋市  
百々米次郎

本家は蛙、支店は蛇

読者の声

東京  
松葉生

仏教は太陽の教

謝告

本会

小経の動物

第七編第十二号

無限の進化

救済日訓

徳川家宣

まゝごと会

寺院の経済問題

会長  
大谷瑩韶

至誠の応現

談合の徳

本会幹事

私を教えて下さる先生

一番強烈な心持

これならば大丈夫

求めるといふこと

一ヶ月優に一万円

鼓膜と共鳴

独り手に金は儲かる

文学博士 谷本 富  
理学士 石川 成章

学師 薩 南 生  
一 記 者

至誠迫神、一以貫之

郡是女学校の概略

国母陛下行啓

其他の感すべき施設

偉大方式の肥料

倫敦から

日曜学校教授法

単級多級の別

法話教授

勤行教授

唱歌教授

嫁と姑の大事な心得

嫁と姑の性欲問題

半日相撲

くろんぼうの手

第四回救済事業大会

歳末の辞

第八編第一号

人生

真宗は何を考へつゝあるか

真宗総合研究所紀要 第六号

信の研究

信と人との根本関係

不必要なら追及するな

信の動機の分解

自覚せぬ苦しみ

電報の符合とその意味

楽しみの煙苦しみの牛

仏血に生くる紡績会社(上)

日曜学校入門

子供の上に立ち入って

大人よりよく聞く女の子

もう三年遅れています

嬰兒をあやかす術の功拙

この話で充分覺りたい

生れ出でたは白痴の子

十四歳で哲学博士

寺院を捨てた青年の告白

宗教家の見たる特殊部落

第八編第二号

人間

学師 青森徳英

一 記者  
花 祭 生

会長 大谷 瑩 韶

理想創造の修養

会長 大谷 瑩 韶

仏血に生くる紡績会社

一 記 者

瘤と見ゆる工場の宗教

四十人に一人が職工

男工より女工が多数

寄宿舎が唯一の家庭

非家庭的な寄宿舎

人なき山中にも賊あり

悪風は工場以外にも吹く

日曜学校入門

花 ま つ り

「法城を護る人々」に対する諸家の感想

京都府  
工場課長

原 佐 一

其一 ノラを去らしめよ

万朝報記者

大 住 嘯 風

其二 「法城を護る人々」の主人公

高 島 米 峰

其三 「法城を護る人々」及びその批評

安 藤 現 慶

「最後の審判者」を読み

成 瀬 賢 秀

其四 両親の生活がその儘主人公の現実

学 師

柏 原 祐 義

其五 「法城を護る人々」から

成 瀬 賢 秀

第八編第三号

富と幸福

辱かしめられたる人々

会長 大谷 瑩 韶

仏血に生くる紡績会社

一 記 者

岩田惣二郎氏と同社

御本山を大切にせよ

十人は居るかどう

止む能はざる伝道熱

工場宗教世間の誤解

便所に隠れる女工達

大阪名物「粟おこし」

社員の全部が濡れ鼠

名高い博士と某紳士

能率増進万能思想を排す

京都府  
工場課長

原 佐 一

「法城を護る人々」に対する諸家の感想(二)

多 田 鼎

真宗寺院生活の過去現代未来

住 田 智 見

真宗寺院の歴史的任務

伊 藤 証 信

寺院生活に対する感想

三 浦 義 晃

一月号の救済を読み

鴻 堂

ケンタウルの如く

松 山 □

松岡譲氏の内生と其芸術

自己批判が足らぬ

今 吉 悟

局外から見たる寺院生活の逃避

佐 口 竹 四 郎



松岡讓氏よりの来翰  
編輯通信

第八編第四号

成 功

宗門教学の真精神

憂ふべき教界の現状

「社会の瘤」「徒食の民」

生活のためにする布教

功名のためにする布教

宗派のためにする布教

国家のためにする布教

如来のためにする布教

人のためにする布教

子弟教養の目的を自覚

布教志望土地と其国語

社会事業の知識を普及

読経生活と腹布教

仏血に生きる紡績会社

最も適当な導師

どこまでも自力で行く

真宗総合研究所紀要 第六号

会長 大谷 瑩 韶

大谷派参事 石 川 成 章  
一 記 者

其辺御一考然るべく

請う先づ隗より初めよ

奇蹟だノ 不思議だノ

月十数回の信仰生活

この辺で一ぷく

かうした家へ嫁きたい

日曜学校出席奨励

大谷派内の思想家

重ぬる誓いの声

犯罪と女の虚栄

無籍貧兒の教育

見る間に百二十俵

伝染病者私用隔離舎設置

本部通信

第八編第五号

事 業

特殊布教協議大会開会の辞

同発起人代表者挨拶

同教学部長挨拶

特殊布教協議大会協議事項

大阪朝日新聞

亀淵 観 励

松 山 亮

山田寺 千 畝

本 多 慧 孝

司会者 石 川 成 章

本会々長 大 谷 瑩 韶

教学部長 関 根 仁 応

第一部「布教々務」

職業

第一章 伝道機関

宗門の青年教家

会長 大谷 瑩 韶

第二章 学校新設

教誨生活十二年

学師 平塚 龍 馴

第三章 知識階級布教

教誨の目的と宗教的信仰

第四章 布教法刷新

物質的の救済が第一歩

第五章 布教取締

犯罪の最初は貧の盗み

第六章 婦人布教師坊守

年々四十万以上の犯罪数

第七章 儀式改良

十日働けば三日間は無手

第八章 布教師養成

囚人を見るには背景大切

第九章 海外布教

物干竿の着物一枚罪の味

第二部 「社会教化」

頭の中に働らく善の理想

第三部 「国体布教」

骨折つても駄目な教誨法

第一章 青年布教

大正の救貧事業

ドクトル・ペリー氏

第二章 児童布教

花売り村

そよかぜ

第四部 「文書伝道」

人と修養、都賀の郷

特殊布教協議大会日程報告

今日今時、記念の館

同実行委員会況報告

一木支う、自治の味

真宗教学会の設立

泥中の蓮、お待ち受

本部通信

警鐘乱打、意外の言

第八編第六号

俗其儘の出家僧（書翰）

畠山 頼 民

肺病何ぞ恐るゝに足らん

肺病は遺伝病ではない

肺病は必ず癒る病氣だ

藻掻けば益々悪くなる

自然の力の偉大を思え

直接奏効する薬はない

救済相談

倫理と宗教の区別

質問者朝鮮東海林生

救済公園

馬の慈善事業

女の徒歩と妊娠

中学生の小使錢

救済月報

救済課の新設

富豪の不徳義

徳川公の気焰

富豪寄附申出

署長の親代り

「人事相談所」

細川 富吉

職工住宅討究

町の癖

本部通信

第八編第七号

向上しつゝある第二の国民

婦人の宗教教化事業

花売り村

救済事業の使命

無縁養育会

救済公園

救済相談

救済月報

救済調査会 △京都府慈善協会 △感化救済事業講習会

手紙一通

本部通信

第八編第八号

世界の変革と宗教家

救済事業の大本

社会事業家の二大要素

私の経営している子守学校

伊藤 証 信

青森 徳 英

小河 滋次郎

そよ か ぜ

浅井 恵 定

大谷 瑩 韶

武田 慧 孝

大谷 瑩 韶

水野 練太郎

米田 庄太郎

佐治 大 謙

盗みする子はどうして

津田明巖

会長の唱歌

乙 身体上

救済公園

本部通信

戦後に於ける日本の立場、蠅退治、職工病、大阪の紡績女工、

第八編第十号

百万の部落改善、片眼部落、貯金五億

謹告

救済月報

北海道の社会事業及其将来

救済事業調査会、大阪市の救済課、東京の救済、救済事業後援

乞食を拾ふ農園の主

会、京都の人事相談の好成績、精神病者監護方法

寺院救済論

本部通信

救済公園

第八編第九号

偶然

大谷瑩韶

出獄人には家庭を与へよ

多田豊寿

わが子に教へられた親の話

安藤專哲

私の経営している無料宿泊

北条龍玄

所謂脳味噌の足らぬ子供

乙 竹岩造

甲 心意上

直観の不確実

興味の欠乏

記憶の薄弱

言語の故障

観念の浅薄

感情の不調

連想の薄弱

意志の薄弱

注意の不定

乙 身体上

本部通信

第八編第十号

謹告

北海道の社会事業及其将来

乞食を拾ふ農園の主

寺院救済論

救済公園

米騒動と良心の改造

奢る者から税を取れ

哀れむべき富豪の心事

本部通信

第八編第十二号

人間と活動

戦争より戦争へ

独逸の末路と処世訓

派内救済制度確立の急務

方面委員の設置に就て

社会問題解決の鍵

文学博士

藤井健次郎

法学博士

神戸正雄

関南生

関南生

巻頭

巻頭

大谷瑩韶

大谷瑩韶

大谷瑩韶

林市蔵氏

小河滋次郎氏

特別会員加入芳名

本部通信

第九編第一号

慈善事業と社会政策

現代無産者階級の発生

救済の意義

現代寺院の弊風と新使命

西比利亜より

まごゝろの救済

救済事業の進路と其批判

働く女の悲哀

この児の為に訴う

本部通信

第九編第二号

救済の意義より見たる時局問題

救済事業の倫理的基礎就いて

施論

救済の意義

宗門とは何ぞ

我が仏教徒の社会的使命

真宗総合研究所紀要 第六号

僧侶と社会問題研究

短歌

帰途(小説)

本部通信

虫明 申太郎

高崎 信

大谷 瑩 韶  
米田 庄太郎  
下村 春之助  
藤井 静宣  
浅井 恵定  
左藤 義詮  
常盤井 現雄  
路傍 行人  
青森 徳英

大谷 瑩 韶  
木場 了本  
金子 大栄  
下村 春之助  
藤井 静宣  
大河内 了悟